

連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

早期教育に過度に熱心な母親

E男：2歳8カ月，知的水準：境界域精神遅滞

主訴：ことばの遅れ，多動，療育センターで自閉症といわれた

生育歴：妊娠中，とくに異常なし。満期正常分娩。頸座3カ月，寝返り7～8カ月，はいはいはみられず，始歩1歳4～5カ月。歩き始めると，どこへでも行ってしまい，しばしば迷子になっていた。発語は8～9カ月と早かった。しかし，「ママ」などの単語は聞かれたものの，以後ことばの数はさほど増えなかった。まだ赤ん坊の頃から母親は英語の教材を使って，子どもに英語のビデオを見せ，英語で声かけをしていた。1歳8カ月頃，一度だけ二語文で応答したことがあったが，その後は言わなくなった。2歳になって単語数が増えてきたが，日本語と英語の両方だった。2歳6カ月頃から，二語文が再び始まった。身体運動発達は全般的に遅かった。

栄養は混合乳で，昼夜問わずよく飲んだ。1歳8カ月，遠方への旅行をきっかけに断乳した。以後，E男はまったく母乳をほしがらなくなった。排泄訓練は7カ月から始め，10カ月頃でほぼ自立しかけていたが，つかまり立ちをするようになってからパンツをやがり始め，今ではオムツを使用している。人見知りはいまだにまったくなく，母親の後追いをすることもなかった。知らない人にも平気で抱っこを要求していた。

絵本を見るのが好きで，パズルも得意である。動物が好きで動物の名前はよく覚えている。歩き始めると，ほかの知らない子どもや友達などをつねったり叩いたりすることが多くなった。最近では噛みつくこともある。

1歳6カ月検診のときに，母親はことばの遅れが心配で相談したが，2歳まで待つように言われた。2歳になってもことばが伸びなかったため，保健師からことばの教室を紹介される。E男は集団行動が苦手で，列をはみ出したり，急に窓の外の車を見たりするために，個別相談を勧められる。個別相談では療育センターを紹介され，2歳4カ月頃から通い始める。療育センターで，担当医に軽度の自閉症と言われる。そこで出会った母親たちから筆者を紹介されて受診となった。

家族構成：父親は会社員。育児には協力的である。母親は本児の妊娠を機に会社を辞め，妊娠中から今までやりたくてもやれなかった趣味をいろいろと始めたという。今も専業主婦であるが，将来のためにある資格取得をめざし試験勉強中である。療育センターで指摘されてからは日本語で話しかけるように心がけている。



初診時、母親は子どもの育児に対して強い不安をもち、自分の生い立ちや自分の両親について次から次へと喋りまくる。子どもの話に戻しても、すぐに自分の母親の話になる。療育センターで障碍の告知を受けてショックを受けたという割には明るく語り、子どものことでどこまで不安をもっているのか疑問に感じるほどである。自分の生い立ちが子どもにどのように影響しているのか、とても気になっているともいう。

SSP (新奇場面法)^{注1)}の流れ

母子二人で自由に遊んでいるときの印象では、E男はとてもおとなしく、ミニカーや電車を手に持って小声で母親にこれは何かと尋ねたりしながら扱っていると、母親は椅子に座ったまま、遠くから優しい声で語りかけている。しかし、抑揚の乏しいことばかけである。二人の会話には何となくよそよそしい感じがして、親子のようなほのぼのとした温かみは感じられない。E男も母親の顔を伺うようにして視線を向けることはあっても、そのほかのときには玩具に目をやっていることが多く、身体的に触れ合ったり、接近したりして甘えるような仕草をとることはない。二人のことばのやりとりで情動面の変化はほとんど感じられず、平板なやりとりに終始している。E男がいろんな玩具を取り出しては眺めていると、母親はそれが何かと細かく説明している。何の玩具か、その説明に母親の意識は注がれている印象が強く、子どもが何をどうしたいのか、その気持ちの動きに関心は向けられていない。

ストレンジャー(ST)が入室してからも親子のやりとりはさほど変わらないが、STも場の雰囲気緊張が誘発されたのか、腫れ物に触るようにして過度にやさしく接している。母子二人のときよりもE男の発語が心持ち少なくなったようだ。木琴を叩き始めるが、やや乱暴でリズム感に乏しい。そのため聞いていても楽しい感じを受けない。表情の変化にも乏しく、楽しそうな身体の動きも見られない。ただ、黙々と打ち続けている。

まもなく母親は退室したが、STと一緒に残る子どものことが

気になる様子はなく、ためらいなく部屋を出ていく。E男は母親がすぐに出ていくのに気がついて目で追っていたが、後追いをすることはなく、表情ひとつ変えることなく、淡々とそれまでやっていた遊びを続けている。STは小声で語りかけながら相手をしているが、E男はいっさい声を出すことはない。一見すると母親の不在にも平気なようであるが、実際には心細くなったであろうことが、彼の発語が消えたことで見て取ることができる。母親と一緒にいたときには小声でもよく話していたのとは対照的である。警戒的になったことは明らかだが、母親を追いかけることはいっさいなく、心細さを表に現すことはない。語りかけるSTに対して自分からかわりを求めて行動することはない。しかし、STの遊びはよく見ていて、時折STのやっていることをそのままそっくり模倣して遊んでいる。

母親が戻ってくると、E男は少しばかり嬉しそうに母親を見ていたが、自分から母親に近づくことはない。母親は入室してE男を見るなり、自分のカバンの中からハンカチを取り出し、即座にE男の鼻水を拭いている。E男も母親が近づいてくると、すぐにこれは何だと母親に聞いてもらいたそうに語りかけ始め、母親との再会によって発語が急に増えてきたのが印象的である。ミニチュアのウシを手に持ち、食べ物をつぎつぎに食べさせ始める。そばでずっと見ていた母親は「ウシさん、おなかいっぱい」と言い始める。ウシに食べさせることばかり繰り返しているE男の遊びを見ていて、母親はその遊びをやめさせたくはなかったからではないかと想像されるような唐突な語りかけであった。それによって二人の遊びがより楽しいものになるということはまったくない。遊んでいるようには見えても、E男の体の動きからすると、楽しんでいるようには感じられない。相変わらず、母親との間ではよそよそしさを感じさせる。

再び母親が退室して今度はひとりぼっちになる。母親が出ていくのを目で追ってはいたが、さきほどと同様に目立った反応はみられない。再び発語がまったく聞かれなくなった。一見平気そうに、玩具を次々に扱ってはいるが、遊びに集中している様子ではない。

STが入室したが、とくに声を出すこともなく、それまでと同じような遊びを繰り返していた。

E男は母親の入室前からその動きを察知してドアのほうを見ていた。母親が入ってくるとE男は少しうれしそうな反応を示す。しかし、再び黙々と玩具を手にして遊び始める。まもなくなぜか部屋の中を動き始めた。母親はそれに合わせるようにしてトラン

注1: 新奇場面法(Strange Situation Procedure: SSP)は子どものアタッチメントの特徴を評価するためのひとつの心理学的実験方法である。具体的には親子が自由に遊べる空間を用い、人工的に母子の分離と再会を2回実施し、その分離と再会の場面で子どもが母親に対してどのようなアタッチメント行動をとるかを観察し評価するものである。

ポリンや滑り台があるとE男に指さしながら教えている。すぐさま母親の誘いに動かされるようにしてE男は滑り台を滑り始めた。滑り終わると、もう一度滑ろうと言って、滑り台の階段のほうに行こうとしたが、母親はE男に向かって「ごろん(前転)しない? ごろんは? マットがあるよ。ごろんしない?」と声をかけた。遊びの流れからすると、とても不自然で唐突な言葉かけであった。E男は一瞬戸惑いを見せて滑り台のほうに行こうとしたが、母親はさらに同じことを言い続ける。すると、E男はマットの上を転がるように前転を始めた。気の乗らない動きだったので、ごちなくよるめいたが、それを見た母親は「ちょっとだめね」と否定的な言葉をかけている。

SSP のまとめ

母親の子どもへのかかわりを見てみると、子どもの動きに同調するような動きがまったく見られず、ことばによって子どもをリモートコントロールしているように見える。表面的には母親の言葉かけは優しいが、入室して子どもと再会すると、子どもの鼻先に目がいき、すぐにハンカチで拭き始めたように、子どもの見かけの姿が周囲からどのように見られるか、そのことをいつも気にかけている。また、文脈とはほとんど関係ないような唐突な子どもへの指示が行われ、それに子どもは動かされ、その動作を母親は上手にできたかどうかすぐに評価して子どもに語りかけている。母親が日頃から自分や子どもが周囲からどのように見られ評価されるかを気にかけて生活していることが想像される。子どもと母親との間に気持ちはまったくといっていいほど通い合っており、淡々としたかかわりに終始している。母子の身体の動きをみていると、遊びの楽しさなどの情動の変化がまったくこちらには伝わってこない。アタッチメントパターンはAタイプ(回避型)^{注2)}である。

ビデオによるフィードバック (VTR フィードバック)

SSP を実施した後、筆者は母親にそのときの子どもの様子を

注2：Aタイプ(回避型)とは、養育者との分離に際し、泣いたり混乱を示すということがほとんどなく、再会時にも養育者から回避的な反応をするタイプで、養育者が安全基地として機能していないものを指す。

録画したビデオを見せ、振り返ってもらった。ビデオに映っている子どもの気持ちを尋ねたが、母親はことばで的確に表すほど反応はよい。しかし、子どもの気持ちを語る際に自分も同じように動揺してしまい、自分と子どもの感情体験の区別さえつきがたいように思われた。母親はいつも自分から子どもに積極的に話しかけているというが、それが子どもにとっては支配的なほどに強く響き、その結果、母親の指示に沿って行動してしまうところが気になることを取り上げると、母親はこの子が生後4カ月のときに、インフルエンザの予防注射で泣いていたときに我慢しなさいと論じていたという。そのとき、看護師がこんな小さな子どもにそんなに我慢を強いるのはどうかと思うと指摘されたことを想起している。この子には他人に頼らずなんでも自分でできるようになってもらいたいという気持ちで育ててきたというのである。

AAI にみる母親の子ども時代の被虐待体験

その後実施したAAI(アダルト・アタッチメント・インタビュー)^{注3)}での「できるだけ小さい頃から始めて、お母さんとの関係を表すような形容詞やことばなどを5つあげてください」との質問に、本人はすぐに「こわい」「きびしい」「おそろしい」の3つをあげ、しばらくしてから「熱心」「互いに一所懸命」と答えている。おのおののことばについて具体的に想起した内容を尋ねると、前者の3つについては「いくつもあるんですけど、小学2年のとき、(私は)問題児だったんです。だから(自分の)母親は家庭訪問の際に、優等生の〇〇君の隣に坐らせてください、と担任に希望を伝えたんです。そしたら、その通りになったんです。授業参観のとき、先生の質問がわからないのに母親の視線を常に感じて、仕方なく手をあげていたんです。授業が終わったとき、無造作に学習道具をランドセルに詰め込んだら、母親がものすごく怒って、ランドセルをおぶっていた自分を蹴っ飛ばしたんです。そのため自分は数メートル吹っ飛んだんです。痛くもなんともなかったんで

注3：アダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview: AAI)は、子ども時代のアタッチメント体験を大人になった時点で捉えるための面接法で、いわば乳幼児に実施するSSPの大人版ともいえるものである。AAIは半構造化された面接法で、子どもの頃の親子間の経験が、今の自分にどのような影響を及ぼしているかを振り返ってもらう。被虐待体験をもつ大人を想定した面接であるため、被虐待体験にまつわる質問が多いが、両親について回想してもらう際に、両親の人物像ではなく、両親との関係そのものに焦点を当てた質問をすることによって、過去の親子関係の質を探っていくものである。

すけどね」「ピアノが弾けないという、指を咬まれたこともあったんです」「水泳のとき、他人にできることができないのか！とと言われて、後ろから突き落とされて、無理矢理泳がされたんです。実は(自分の)母親は身体が悪くて泳げないせに「でもそのおかげで、水泳もピアノも学年でも1, 2番になりました。スパルタ教育のおかげですけど」「(母親の)お手伝いをずいぶんしました。自立させるためというか、しっかりさせたいというふうに思っていたみたいですけど」「頭をかち割ってやろうかというほど、よく私の頭をパンと叩いていました」と凄まじい内容の体験を意外なほど淡々と語っている。

後者の「熱心」「互いに一所懸命」については、「とにかく教育熱心で、図書館の本をすべてというくらい読んだと思います」「私はやりたくないんだけど、水泳もピアノも母親の期待に応えなければいけないから、一所懸命やっていた。一所懸命課題をこなすという感じだったと思います」と述べている。

最後のほうで、「20年後のあなたのお子さんに対して、3つ望みをあげるとしたら、何を希望しますか」との質問には、間髪をいれず「まず、自立」と確信的に答え、ついで「あとは大志とまではいかないまでも、今後自分で何をやりたいとか、目的をもってほしい」と語っている。いかに自立への志向が強いかがよくうかがわれる反応である。

そのほか印象的であったのは、本人に「ご自身が子どもだった頃の経験から、とりわけ学んだと思うことはありますか。子ども時代に、あなたが経験したことから学んだと感じることをお聞きしたいのです」と尋ねたとき、「それはやっぱり自立というか、自分で生きていく生存能力ですね。だから子どもに対しても生存能力の高い子になってほしい。どういう環境でも生きていける子になってほしいと思っているんです」と回答したことである。自分のこれまでの被養育体験を肯定的に捉えていること、さらには自分の子どもに対しても同じように接することが大切であると確信をもって語っている。最後に、「あなたに育てられることによって何を学んでほしいと思いますか」と尋ねると、「考えたことはないですけど、私(母親)は君のことを思っているんだよ、ということですかね。わかっていると思うんですけどね」と述べて終わっている。

AAIの評価

AAIでの評価は、明らかに被虐待体験と思われるような内容

であるにもかかわらず、自分の母親に対して肯定的に語っている。そのことからアタッチメント軽視(拒絶)型^{注4)}と思われる。しかし、過去の親子関係について想起している最中に、涙を流すなどいまだその葛藤が強く、動揺しやすい状態にある。初診時に子どものことよりも自分の生い立ちや自分の親のことを盛んに語りだっていたことにそれが端的に示されている。

関係支援の経過

月に1回～数回の頻度でのセッションを開始したが、そこで筆者が心がけたのは、E男の気持ちを解放して自分を表に現すことができるようになることであった。すると担当スタッフとの間で「ご自分に自分を少しずつ表現するようになっていった。それと平行して母親との面接ではセッションでの子どもの様子を取り上げながらともに考えていくように心がけた。母親は子どもの様子を見ては自分の子ども時代を盛んに想起していた。たとえば、E男は周囲の人たちがとても気になり、そのため注意や関心が拡散してしまい、かつ周囲の人たちの誘いや動きに吸い込まれるようにして動いてしまうことを取り上げたときには、自分の幼児期～学童期の姿ととてもよく似ていると母親は想起し、自分も周りの大人の意向に非常に影響されてしまい、動かされてしまっていた。自分がないような状態であった。それがよくなったのはずいぶん後になってからだというのである。

このように面接では一見すると母親は子どものことがよくわかっているように語っているが、現実にはいまだ過去に強くとらわれ、それが子どもとの関係にも強く反映していた。したがって、このような状態にある母親との面接で内省的な態度を求めることは好ましくないと判断し、子どもの主体性を少しでも確かなものにしていくことを心がけるにとどめた。母親には、子どもの気持ちを受け入れることが大切であるという思いはあっても、それをすると際限なく甘えを助長させてしまい、大変なことになるのではないかという不安があるという。頭ではわかったつもりでも、体験としては自分の身に残っていないため、現実の焦燥感に突き

注4：アタッチメント軽視(拒絶)型とは、自分の人生におけるアタッチメント関係の重要性や影響力を低く評価するタイプ。表面的には自分の親のことを理想化し、肯定的に評価したりするが、親との具体的な相互作用やエピソードについてはほとんど語ることがなく、潜在的に、親あるいは他者との親密な関係を避けようとしていることがうかがわれる。

動かされるようにして、子どもと関わってしまっているのではないかと思われる。

母親のところに浮かぶ幻想的子ども像

前回、母親が子どもを前にした際に、思い浮かべている子ども像には現実の子どものありようのみでなく、子どもへの期待や自分の思い描いた理想の姿などが反映していることを述べてきた。そのことは実際の子育てを営んでいくうえでとても大切なことなのだが、今回取り上げたような虐待が絡む事例においては、それらとは質的に大きく異なる深刻な子ども像が母親のところに浮かんでいることがわかる。その端的な例がここに示されている。子どものころの動きとは脈絡のない形で、子どもに唐突に前転を強いたりしている母親の姿である。なぜこのようなことが起きるかといえば、このときの母親自身のころにも脈絡のない形で、過去の親子関係とその体験世界が唐突に浮かび上がっていたからではないかと思われるのである。

筆者の虐待関係の事例の臨床経験のなかで印象的であった事例がすぐに思い起こされる。それは当時1歳4カ月だった女兒(F子)と母親との次のようなセッションの一コマである。

F子はなかなか母親に甘えることがなく、母子関係が深まらないことが問題となっていた。あるセッションでF子と母親が遊んでいたが、F子はMIUの小さな玩具に興味を示し、次々に手にとって遊び始めた。ずいぶん楽しそうであったが、あるときF子は手に取ったミニチュアの飛行機を空中に飛ばしたかったのであろうか、飛行機をもった手を伸ばして空を舞うように動かした。そのとき、そばで付き合っていた母親は誰かに叩かれるのを守ろうとするかのようにして、思わず手で自分の顔を覆った。

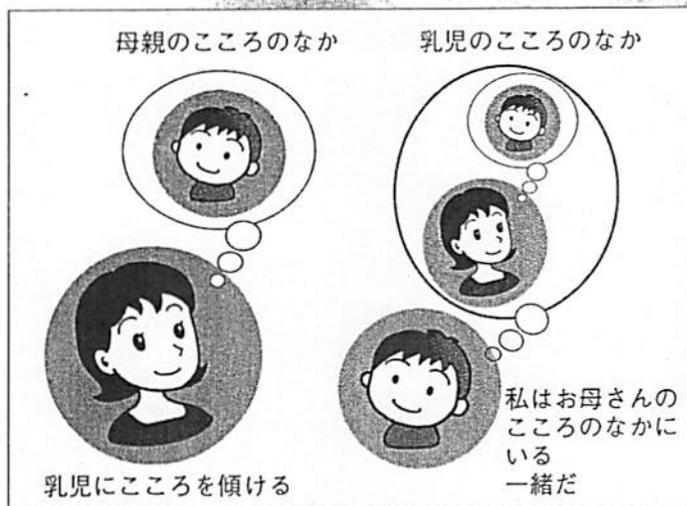


図1 母親のころを通してみる子どものころの世界

筆者はこのときの母親の予想外な反応に驚かされたが、その後の母親の面接で、母親は幼児期に親から虐待された体験を回想して語ったのである。このときの母親には、子どもの動きが過去の虐待された体験記憶を想起させたであろうことは容易に想像できる。

本来、養育者のころのなかに自分を発見するはずの子ども(図1)がそこに自らの姿を発見することができないとき、子どもは自分の姿を見出すことができず、途方にくれることになる。今回述べた母親のところに浮かぶ子ども像は、これまで幻想的子ども像として取り上げられ、無意識の次元で起こる現象であることが対応をいたく困難にさせている。今日の乳幼児精神保健における最大の問題となっているのはいうまでもない。